

平成 22 年度国際学術交流研修報告

英国大学における学生派遣とエラスムス

ロンドン研究連絡センター

多田 里奈

目次

1. はじめに
2. 英国学生の海外派遣状況
3. エラスムス
4. 英国大学の留学フェア
5. 結語

1. はじめに

大学の国際化において、海外の大学との交流、とりわけ研究者・学生の人的交流は重要である。日本では政府による「留学生 30 万人計画」のもと、国際化拠点整備事業（グローバル30）がスタートする等、大学では英語コースの設置や留学生受入環境の整備等が進められている。その成果あって、日本に留学する外国人は、2010 年 5 月現在で 14 万人を超え（前年比 9,054 人（6.8%）増）¹、過去最多を更新した。

一方、日本人学生・研究者の「派遣」に関しては、留学生の「受入」に比べて遅れを取っている。最近、日本人の若者は海外留学したがるらない、という話をよく耳にしていたが、この度の文部科学省調査で実際に数字として表れた。2009 年度の長期海外派遣研究者数（大学院生、ポスドク等は調査対象外）がピーク時の半数以下にまで減少²、さらには、2008 年度の日本人留学生は 6 万 6833 人（前年比 11%減）で、4 年連続で落ち込み幅は過去最高³となり、日本人の内向き志向が鮮明になった。日本の科学技術力・研究力を維持していくための真の国際化を目指すには、受入留学生の数を増やし、英語で実施されるコースを作るだけでなく、日本人とくに学生・若手研究者自身の国際経験も重要ではないだろうか。

ヨーロッパでは、早くから国家間の学生・研究者交流が推進され、特に 20 年以上前から実施されてきた学生・教員交流計画「エラスムス」によるところが大きい。最近では「エラスムス・ムンドゥス（世界版）」で、ヨーロッパ域外にも対象を拡げて、学術の国際交流がますます活発になっている。

本報告書では、研修先の英国における、学生の海外派遣状況、エラスムスの実施状況および学生の海外派遣を増やすための政府や大学の取組を報告する。

¹日本学生支援機構調査 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data10.html

²文部科学省発表 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/1298237.htm

³文部科学省発表 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/12/1300642.htm

2. 英国学生の海外派遣状況

英国は、もともと自国の高等教育レベルが高いこと、英語が母国語であり外国語の学習意欲が比較的低いこと等から、他のヨーロッパ諸国と比べても海外留学する学生・研究者の数は少ない。政府や大学等の高等教育国際化への取り組みも、長年、授業料という自己収入の源になる留学生獲得に重点を置いており、英国学生の留学に関するサポートや研究は遅れていると言わざるを得ない。

しかし、日本同様、英国でも 3～4 年前から、英国学生の留学の少なさ、内向き志向を懸念する声が聞かれるようになり、留学生受入と派遣のアンバランスについて問題視する議論が交わされるようになった。2007 年には英国政府（当時のイノベーション・大学・スキル省）から「Global Horizons for UK Students」⁴、2010 年 11 月には、イングランド高等教育資金配分会議（Higher Education Funding Council for England (HEFCE)）から「International student mobility literature review」⁵の報告書が発表され、いずれも、英国学生の国際流動性の低さとそれに伴う英国の国際競争力低下の懸念を解説するとともに学生が海外留学から得られる利益を示し、学生の留学に対する高等教育関係者のサポートの重要性が書かれている。

英国が受け入れる外国人留学者数は 40 万人を超え、アメリカに次いで世界第 2 位である。一方、英国からの派遣学生数は、統計は正確に実施されていないが、約 33,000 人と見込まれる。先述のとおり日本では、受入数が派遣数の約 2 倍であるのに対し、英国はそれも大幅に上回る 12 倍と非常に大きなアンバランスが見られる（図 1）。

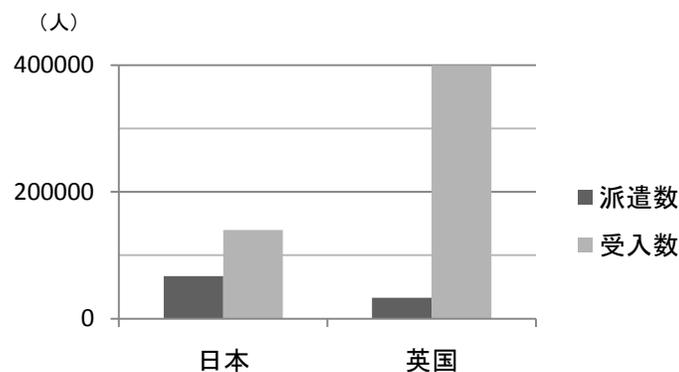


図 1 日本および英国の学生派遣・受入数

表 1 には、英国学生派遣先国と受入留学生出身国の上位 5 カ国とその人数を示す。派遣先国の約半数は、アメリカ、オーストラリア等の英語圏国で、学位を取るための留学（英国大学には在籍せ

⁴ <http://www.cihe.co.uk/category/knowledge/publications/>

⁵ <http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/mobility.htm>

ず、入学から卒業まで留学)が多い。ヨーロッパ諸国への留学も多く、エラスムス等の英国大学の学位プログラムの一部としての留学が多いのが特徴である。アジア、アフリカ、中東、南米等への留学者は少ない。他方、受入留学生の出身国は、中国やインドをはじめとするヨーロッパ以外の国が3分の2を占める。ヨーロッパ以外の国からの留学生からは高い授業料を徴収できることから、それらの国での留学生誘致に重点が置かれていることが一つの理由である。派遣先国と受入出身国という点においても、派遣と受入の大きなアンバランスが見られる。

表 1 国別の英国学生派遣数と受入留学生数

英国学生派遣先 (2008, OECD ⁶)		受入留学生出身国 (2008/2009, UUK ⁷)	
1	アメリカ合衆国 8,376 人	1	中国 47,035 人
2	フランス 2,519 人	2	インド 34,065 人
3	ドイツ 1,723 人	3	アイルランド 15,360 人
4	オーストラリア 1,696 人	4	ナイジェリア 14,380 人
5	アイルランド 1,421 人	5	アメリカ合衆国 14,345 人

このような状況を受けて、現在、ブリティッシュ・カウンシル⁸では、政府と協力して高等教育における国際的協力・人物交流にかかる助成事業をいくつか実施している。事業には大きく分けて2つのタイプがある。ひとつは英国学生向け海外留学プログラムの実施で、例えば、中国とインドで数週間、言語・文化を学ぶサマー・プログラムを実施している。もうひとつは、英国と海外の高等教育機関のパートナーシップ構築に対する支援を通して、学生の交流を推進するものである。PMI2 Connectという名称で、2009年から2011年までの3年間実施され、約100のパートナーシップを支援している。今年度で事業は終了するが、支援終了後も持続的な機関間協力、教員・学生の交流が期待される。なお、いずれの事業も、中国、インド等の受入留学生数の多い国をターゲット国としており、派遣と受入のバランスを取ろうとしているようである。

近年はこのように、ヨーロッパ以外の国との学生交流に力を入れているようであるが、英国大学の学生にとって最大の留学プログラムは、EUのプログラム「エラスムス」である。ヨーロッパという広範囲で毎年約20万人という大規模な学生交流が行われ、他に類を見ない成功したプログラムである。次項では、エラスムスについて、英国においてプログラム実施を担当するブリティッシュ・カウンシルおよび英国最大規模の学生派遣を行うマンチェスター大学でのインタビューをもとに報告する。

⁶ 2008年 OECD 統計 <http://stats.oecd.org/Index.aspx>

⁷ 2008/2009年度 UUK 統計 <http://www.universitiesuk.ac.uk/PolicyAndResearch/Statistics>

⁸ <http://www.britishcouncil.org/new/>

3. エラスムス

(1) エラスムス人物交流プログラム (Erasmus Mobility Programme)

ヨーロッパの高等教育機関間の協力、人物交流を促進するため、1987年に欧州委員会 (European Commission) が開始したエラスムス・プログラム (ERASMUS Programme) は、ヨーロッパ国家間の文化的相互理解と「ヨーロッパ人・アイデンティティ」の形成を目的として発展を続けてきた。2007年から2013年は、EUの生涯学習プログラム (Lifelong Learning Programme) のひとつとして実施されているが、初期から続いている高等教育機関間の学生交流「留学 (Study)」に、海外の機関・企業での「就業 (Work Placement)」が加わり⁹、また教職員交流プログラムも始まった。本報告書では特に学生交流「留学」について報告する。

エラスムス参加国は年々増えており、2011年2月現在、欧州の33カ国、計4,000以上の高等教育機関が参加している (表2)。欧州委員会は全体の統括を行い、実際に派遣・受入のプログラムを実施するのは、各参加国である。各参加国にはエラスムス対応機関 (National Agency) があり、その国におけるプログラムの統括を行っている。英国におけるエラスムス対応機関はブリティッシュ・カウンシルであり、ウェールズにあるカーディフ事務所が担当している。

表2 エラスムス人物交流プログラム参加国 (2011年2月現在、33カ国)

Austria	Belgium	Bulgaria	Cyprus
Czech Republic	Denmark	Estonia	Finland
France	Germany	Greece	Hungary
Iceland	Ireland	Italy	Latvia
Liechtenstein	Lithuania	Luxembourg	Malta
Netherlands	Norway	Polska	Portugal
Republic of Croatia	Romania	Slovakia	Slovenia
Spain	Sweden	Switzerland	Turkey
United Kingdom			

⁹ EUの「レオナルド・ダヴィンチ・プログラム」で実施されていたものがエラスムスに統合された。

ブリティッシュ・カウンシルの役割は、英国の参加機関への助成金配分、各機関のエラスムス担当者を対象とした説明会、ワークショップ等の開催や問い合わせ対応等の英国内での統括、英国におけるプログラム推進ならびに欧州委員会および他国の対応機関とのミーティング、連絡調整等、多岐にわたる。

エラスムスの募集は、各高等教育機関が在学生から申請を受け付ける。学生は、在学する高等教育機関がエラスムスの協定を持つ海外の高等教育機関から留学先を選ぶことができ、留学期間は3～12カ月である。各高等教育機関が選考を行い、採用者を決定する。

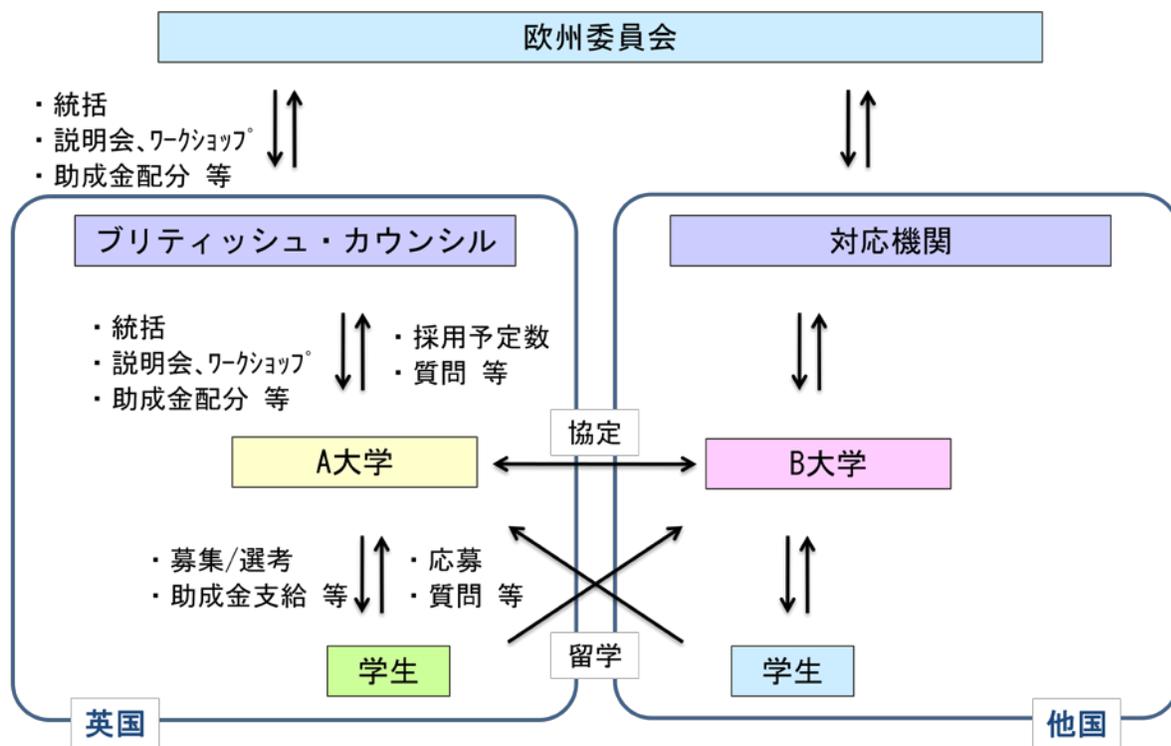


図 2 エラスムスにおける各機関の役割イメージ

高等教育機関の参加資格

高等教育機関がエラスムスに参加するためには、「エラスムス大学認可」(Erasmus University Charter)の取得が必要である。欧州委員会の代理機関(Education, Audiovisual and Culture Executive Agency (EACEA))に申請し、プログラムを実施する体制の条件を満たせば授与される。英国においては、すべての大学がすでにエラスムス大学認可を持つが、カレッジなどの小規模の機関は持っていないところもある。

学生の参加資格

エラスムス大学認可を持つ国内の高等教育機関に在籍する第 2 学年以上の学生が、在籍大学のコースの一部としてのエラスムスに参加する資格がある¹⁰。2009/2010 年度までは、ヨーロッパ国籍の学生のみに限られていたが、2010/2011 年度募集からは国籍を問わず、英国の高等教育機関に在学するすべての学生が参加資格を持つ。

助成金

エラスムスに採用された学生は、助成金（grant）を毎月英国の在籍大学から受け取る。各年度の助成金額は、募集時点では確定しておらず、募集締切後、ブリティッシュ・カウンシルが各機関から採用予定数の報告を受けて決定する。2010/2011 年度は募集時点では、月 225 ユーロ（約 25,000 円¹¹）とされているが、ブリティッシュ・カウンシルによると、通常、募集時点では少し低く見積もっており、実際には月 300～380 ユーロ（33,000～40,000 円）になるということである。この助成金だけでは海外で生活するのに十分ではないが、多くの学生が、政府の奨学金（学生ローン）を合わせて受給している。このように、奨学金を補給する助成金を、英国では「トップアップ助成金（top-up grant）」という。エラスムス助成金は返済不要である。学生はエラスムスの他のトップアップ助成金を受給してもよい。

学生 1 人当たりの助成金額は、各国が各々決めており、英国の学生が受け取る額は比較的多いようである。英国の学生が受け取る助成金額は、留学先国を問わず同額であるが、留学先国（都市）によって、渡航旅費や生活費（物価）が大きく異なるため、例えばパリ等の大都市に留学する人にとっては資金不足となるかもしれないが、物価が比較的安い東欧諸国に留学する人にとっては、十分すぎる資金となるようである。

高等教育機関にも、エラスムス参加学生数に応じた助成金（Organisation of mobility grant）が配分され、エラスムス担当職員の雇用やプログラム推進等の目的に使用できる（表 3）。

表 3 高等教育機関に配分されるエラスムス助成金

参加人数	1人当たりの助成金額
1～25人	€ 230
26～100人	€ 190
101～400人	€ 150
401人以上	€ 130

¹⁰ 就業（Work Placement）には第 1 学年の学生も参加資格がある。

¹¹ 1 ユーロ=110 円換算

授業料

エラスムス学生は、留学先の高等教育機関の授業料は免除される。また、在学する英国の高等教育機関の授業料についても、英国政府の授業料免除スキームに基づき、1年間の留学の場合、免除される。また、1年未満の留学の場合は、全学免除はされないが、高等教育機関によって、留学期間や授業料ステイタス¹²に応じて減額される場合がある。

逆に受け入れる立場として見ると、英国大学は他国から来るエラスムス学生から授業料を徴収できない。留学生を一種のビジネスの対象として見る英国大学にとっては、財政面では何のメリットもないプログラムであるが、派遣する在学学生にとってのメリットは非常に大きいため、多くの大学から積極的な参加姿勢が見られるとのことである。

単位認定

留学する学生にとって、最も重要なことの 하나가、単位認定 (Academic Recognition)、すなわち留学先で取得した単位を自国の在籍機関の単位として認めてもらうことである。エラスムスでは、自国の在籍機関の学位プログラムの一部として、留学先で履修したコースの単位を持ち帰る。具体的には、留学開始前に学生、派遣側機関、受入側機関の三者が、履修コースと単位数について同意の書面を交わす。留学終了後、受入側機関で発行された成績証明書等により、同意のとおり単位が認定される。単位互換の方法としては、ボローニャ・プロセスの中で整備された単位互換制度 ECTS (European Credit Transfer System)¹³の導入が促進されている。

英国学生の参加状況

エラスムスには、現在までに、ヨーロッパ全体で 220 万人以上、英国からは 19 万人以上の学生が参加し、国を超えた高等教育機関の協力・人物交流に大きく貢献している。

英国学生のエラスムス参加人数は、2005/2006 年度以降増加を続けており、2009/2010 年度には 11,746 人の学生が参加した。

「The Erasmus programme 2008/2009 - A Statistical Overview」¹⁴によると、2008/2009 年度、ヨーロッパ全体の参加者数は 198,523 人。派遣数については、1 位フランス (28,283 人)、2 位ドイツ (27,894 人)、3 位スペイン (27,405 人)。英国学生は 10,826 人の 6 位で、フランス、ドイツの 3 分の 1 に過ぎない。なお、当初は海外の高等教育機関への「留学」のみであったが、2007 年

¹² 英国では、自国出身の学生と留学生とで、授業料が大きく異なる。出身国がヨーロッパの場合、ステイタスは英国学生と同等に扱われる。

¹³ http://ec.europa.eu/education/lifelong-learning-policy/doc48_en.htm

¹⁴ <http://ec.europa.eu/education/erasmus/doc/stat/report0809.pdf>

度以降、海外の機関・企業での「就業」が加わり、前述の人数のうち 7,429 人が留学、3,397 人が就業である。英国は他の国に比べて就業の割合が高い（図 3）。受入数については、1 位スペイン（33,172 人）、2 位フランス（24,614 人）、3 位ドイツ（21,932 人）、4 位英国（20,850 人）。英国では受入が派遣の 2 倍という不均衡が生じている（図 4）。なお、全在学生数あたりのエラスムス参加率にすると、英国は 0.46% となり 31 カ国中 29 位、卒業生数あたりの参加率にすると、英国は 1.60% となり 30 位と最下位から 2 番目になる。表 4 には、エラスムス参加学生数の多い英国大学を示す。

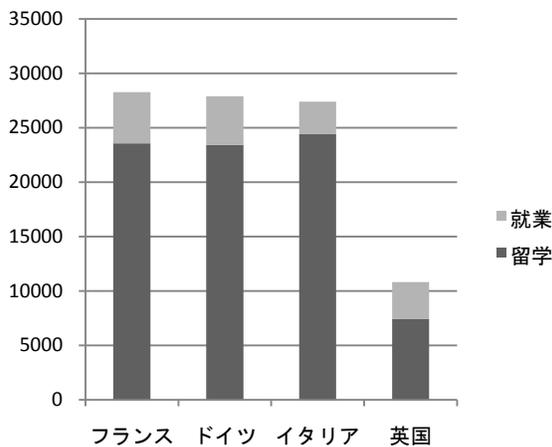


図 3 エラスムス派遣人数と留学/就業内訳 (2008/2009 年度) (派遣人数上位 3 カ国と英国)

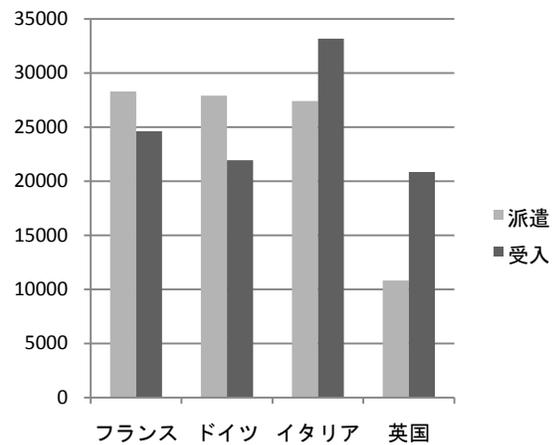


図 4 国別エラスムス派遣・受入数 (2008/2009 年度) (派遣人数上位 3 カ国と英国)

表 4 英国大学別エラスムス参加人数 (2008/2009 年度)

英国順位	全参加国順位	大学	エラスムス参加学生人数
1	80	University Of Bristol	431
2	81	The University Of Nottingham	425
3	88	University Of Manchester	402
4	126	University Of Leeds	341
5	132	University Of Sheffield	334
6	134	University Of Bath	333
7	215	Cardiff University	254
8	217	University Of Edinburgh	254
9	219	University of Durham	252
10	220	University Of Birmingham	252

参加率が低いということは競争率が低いと考えられるが、一概にそうとは言えない。例えば、英国大学において言語および地域研究の学位プログラムでは、4年間のプログラムのうち第3学年時に留学が必須であるため、エラスムスの競争率は高い。一方、他の科目（特に理系）専攻の場合、エラスムスで単に語学を学びに行くことはできない。留学先では専攻科目を留学先の言語で履修することになり、言語能力は必要条件である。しかし、英国学生はヨーロッパの他の国に比べて、外国語習得の意欲が低く、実際に習得者が少ないため、これらの専攻ではエラスムス派遣人数が募集定員を割る場合がある。ただし近年は、北欧、オランダ、ドイツ等の国では英語のプログラムが実施されているため、これらの国への留学が集中する傾向があるようである。なお、英国では、言語専攻の学生がエラスムスに最も多く参加しているが、他の参加国ではビジネス専攻の学生が最も多い。

ブリティッシュ・カウンシルは、エラスムス参加学生数の増加傾向を評価する一方で、英国学生の内向き志向による能力不足から、英国の国際的競争力が失われると警鐘を鳴らしている¹⁵。ブリティッシュ・アカデミーからも¹⁶、英国学生が語学力不足のために、今後のキャリアで国際的競争から取り残されることを懸念する報告が出されており、今後、言語専攻以外の学生派遣推進が課題になると思われる。

プログラムの推進

ブリティッシュ・カウンシルの大きな役割の一つが、プログラムの推進である。英国内の高等教育機関を集めて説明会、ワークショップを定期的に開催し、プログラムの推進を依頼している。ブリティッシュ・カウンシルが作成した各種ポスター、ブローチャー等は、ウェブページ¹⁷よりダウンロードできる。最近では紙ベースの宣伝は減少傾向にあり、電子媒体へと移行してきており、フェイスブックも利用している。



写真1 エラスムスブローチャー

¹⁵ ブリティッシュ・カウンシル報道発表 <http://www.britishcouncil.org/erasmus-about-news-2.htm>

¹⁶ ブリティッシュ・アカデミー報道発表 <http://www.britac.ac.uk/news/news.cfm/newsid/460>

¹⁷ <http://www.britishcouncil.org/erasmus-promotional-material-2.htm>

面白いと思うのは、ブリティッシュ・カウンシルはエラスムス帰国者の体験報告や写真のコンテンツ「エラスムス・コンペティション」を実施しているが、ここで集まったOB・OGの生の声を、広報に大いに役立てていることである。ウェブサイトでは、ケース・スタディーとして紹介され、広報ブローシャーには、生き生きとした写真とともに海外留学の魅力が伝えられている。

最近では、海外留学が将来のキャリアに有利になることも伝えられている。先述の HEFCE の報告書「International student mobility literature review」の作成にはブリティッシュ・カウンシルも関わっており、雇用者が学生の海外経験を評価していること、エラスムス参加者は上位の学位を取得し平均以上の給与を得ている等の調査結果が報告されている。

(2) エラスムス・ムンドゥス (Erasmus Mundus)

エラスムス・ムンドゥスは、エラスムス人物交流プログラムの大成功を受け、次の段階として、ヨーロッパと第三国すなわちヨーロッパ以外の国々との高等教育に関する協力と交流を目的に、2004年に開始された欧州委員会のプログラムである。ムンドゥスとは、ラテン語で「世界」の意味で、「世界版エラスムス」ということになる。ヨーロッパ以外の国からも参加可能ということで、日本の高等教育機関でも注目されている。

2009年から2013年の5年間は、エラスムス・ムンドゥス第2期になり、ヨーロッパの高等教育の発展推進および第三国との協力を通じた相互理解推進と高等教育分野における第三国の持続可能な発展への貢献を目的に、次の3つの「アクション」が実施されている。

アクション1： 修士・博士共同プログラムの実施

アクション2： EU諸国と第三国の高等教育機関間パートナーシップ構築と人物交流

アクション3： ヨーロッパの高等教育の世界的推進

アクション1では、3つ以上のヨーロッパの国を含む複数の国（第三国も参加可）の高等教育機関によるコンソーシアムが、修士・博士レベルのジョイント・ディグリーまたはダブル・ディグリー（マルチプル・ディグリー）プログラムを実施する。プログラムには、世界中の国・地域の大学院生、研究者に参加資格があり、コンソーシアムのウェブページを通じて申請可能である。プログラム参加者は、奨学金を受給し、通常2～3の高等教育機関でコース履修し、学位を取得することが

できる。2004～2010年までの7年間に、10,111人の大学院生、1,614人の研究者が参加した。理系の課題が多数採択されており、理系学生・研究者の海外派遣増に寄与していると考えられる。

アクション2は、エラスムス人物交流プログラムの世界版といえる。3つ以上のヨーロッパの国からの5つ以上の高等教育機関とヨーロッパ外のターゲット国¹⁸の高等教育機関がコンソーシアムを形成し、人物交流プログラムを実施する。基本的に当該コンソーシアム参加機関の¹⁹学生（Strand2は学部生不可）、ポスドク、教職員（事務系含む）に参加資格がある。期間は1～34月と、エラスムス人物交流プログラムより長期間の助成を受けることができる。2007～2010年までに、822機関（うち256機関がヨーロッパ、566機関がヨーロッパ外）、116のパートナーシップが支援を受け、約20,000人が交流した。

以上のとおり、エラスムス・ムンドゥスはエラスムス人物交流プログラムと比較して、交流の規模は小さいが、ヨーロッパ外との国との交流ができる点、個人への助成期間が長く、助成金額が大きいこと等の多くの利点があげられる。

なお、欧州委員会からの助成金は一旦、各国の代表機関（National Structure）（英国においてはブリティッシュ・カウンシル）を経由することなく、直接コンソーシアムに渡る。また、通常、大学では国際部を経由せず各部局が直接担当している場合が多いようで、調査訪問したマンチェスター大学でも、残念ながら詳しい話を聞くことはできなかった。

¹⁸ Strand 1（ENPI, DCI, EDF, IPA 対象国）（中東、中央アジア等）、Strand 2（ICI 対象国）（日本を含む工業国）に分かれている

ENPI - European Neighbourhood and Partnership Instrument

DCI - Development Cooperation Instrument

EDF - The European Development Fund

IPA - Instrument for Pre-accession Assistance

ICI - Industrialised Countries Instrument

¹⁹ ターゲット国により参加資格が異なる。コンソーシアム参加機関に在籍しなくても参加資格がある場合もある。詳しくはエラスムス・ムンドゥス・プログラムガイドを参照。

4. 英国大学の留学フェア

最後に、英国で訪問した2つのタイプの大学の国際部が主催する留学フェアを報告する。

(1) ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) 留学フェア (2010年11月2日)



写真2 国毎のブース



写真3 専攻毎に色分けされた
インフォメーション・シート

協定校が国・地域毎にブースを並べ、過去にその大学に留学していた学生やその大学から来ている外国人留学生が説明役として参加する。平日の夕方開催され、留学に興味がある学生も、たまたま通りがかった学生も誰でも参加できる雰囲気であった。

(2) オクスフォード大学インターナショナル・キャリア・デイ (2011年1月22日)



写真4 オクスフォード大学国際部のブース



写真5 フェアの様子

UCLの留学フェアとは異なり、就職と留学の両方を含めた卒業後の国際的な進路について情報提供を行う大規模なフェア。オクスフォード大学国際部のブースではキャリア・パスの紹介をしている。フェア参加機関は、企業、大学等研究機関、留学フェローシップを提供する機関（JSPS ロンドンも参加）ならびに就職支援エージェント等、約30機関であった。土曜日の午前11時から夕方にかけて開催され、入学したばかりの学部1年生から博士課程の学生まで、さまざまなレベルの学生が興味を持って訪れていた。

5. 結語

2010年は、英国の高等教育に大不況の波が押し寄せた年だった。次年度から高等教育予算が大幅に削減される結果、数年前まで無償だった授業料が、年間上限 6,000 ポンド（約 80 万円²⁰）、トップ大学では 9,000 ポンド（約 120 万円）を課すことができるようになるという。連日の関係者による議論や報道、抗議行動を目にし、英国の高等教育が今大変な過渡期にあることを実感した。

選んだ調査テーマ「学生派遣」は、私が大学職員になった動機であり興味のあるテーマだが、英国の大学にとっては優先順位の低いテーマであることは承知であった。調査を進める中で、英国が留学生受入と派遣にかける予算、政策、議論の規模の大きな差を知り、大学にインタビューに応じてもらえない状況が続き、このテーマで進めていいのか不安になった時期もあったが、ちょうど同時期に、日本、英国から次々と「学生の内向き志向」を懸念する声が出た。2010年ノーベル化学賞受賞者の根岸米パデュー大学特別教授の「日本の若手研究者には外国に出て苦勞、苦難を体験しながら日本がどういう国か見てほしい。」という言葉は、高等教育に関わる身として非常に重みがあり、大学職員として何かできることを考えたいと改めて思った。

最後に、学生派遣を推進するために、本調査を通して重要と感じたことを4つ挙げたい。

一つめは、エラスムスのような留学プログラムの提供である。ブリティッシュ・カウンシルによると、英国における過去数年間の留学者の増加は、エラスムスによるところが大きい。エラスムスの助成金額は決して多くないが、歴史も知名度もあり、よく整えられた留学制度であるから、安心して海外留学への第一歩踏み出せるのだと思う。そういうきっかけが学生には必要だと思う。

二つめは、単位互換制度である。ブリティッシュ・カウンシルのエラスムス担当マネージャーは、単位認定は大変な仕事だが、大学が学生交流を実施するうえで一番重要な仕事だとおっしゃった。ヨーロッパでは、ボローニャ・プロセスにおいて、いくつかの国では学位システム自体を変更する等の努力があり、現在のヨーロッパ高等教育圏を築き上げてきた。単位互換制度を作ることは決して容易ではないが、高等教育がますます国際化する今日では大変重要な制度である。

三つめは、成功のキャリア・パスの提示である。これは、JSPS ロンドンが在英日本人研究者からよく聞く課題でもあり、雇用者側の協力も必要である。海外経験が評価されるオープンな雇用・昇進制度があれば、海外留学するインセンティブになる。

四つめは、海外にいる日本人学生・研究者への支援である。日本の研究助成や奨学金への申請には「日本の大学等に所属する者」である必要があることが多い。既に海外にいる日本人の立場で考えると、不公平な制度のように思われ、今後、在外国の日本人への助成制度の充実が望まれる。

²⁰ 1ポンド=135円換算

謝 辞

本報告書作成にあたり、インタビューに応じてくださった英国高等教育関係者のみなさま、支援・助言をいただきました日本学術振興会ロンドン研究連絡センターのみなさまに御礼申し上げます。また、本研修の機会を与えてくださった日本学術振興会と大阪大学にこの場を借りて感謝申し上げます。

インタビュー協力者

- 1) Mr. David Hibler, Programme Manager, Erasmus, British Council (Cardiff)
- 2) Mr. Kevin Van-Cauter, Higher Education Adviser, British Council (Manchester)
- 3) Dr. Caroline Whitehand, Manager of Study Abroad (Assistant Director, International Development) Student Recruitment, Admissions & International Development, The University of Manchester

参考文献等

- 1) Global Horizons for UK Students
<http://www.international.ac.uk/resources/GLOBAL%20horizons.pdf>
- 2) International student mobility literature review
<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/mobility.htm>
- 3) 欧州委員会 エラスムス ウェブサイト
http://ec.europa.eu/education/lifelong-learning-programme/doc80_en.htm
- 4) ブリティッシュ・カウンシル エラスムス ウェブサイト
<http://www.britishcouncil.org/erasmus>
- 5) Erasmus Operational Handbook Academic Year 2010-2011
<http://www.britishcouncil.org/erasmus-1011-ophbook-and-annexes-310710.pdf>
- 6) ブリティッシュ・カウンシル エラスムス・ムンドゥス ウェブサイト
<http://www.britishcouncil.org/erasmus-programmes-erasmus-mundus.htm>
- 7) The Education, Audiovisual and Culture Executive Agency (EACEA) エラスムス・ムンドゥス ウェブサイト http://eacea.ec.europa.eu/erasmus_mundus/index_en.php
- 8) ERASMUS MUNDUS 2009-2013 Programme Guide
http://eacea.ec.europa.eu/erasmus_mundus/programme/documents/2011/em_programmeguide_1612_en.pdf
- 9) JSPS London 学術調査報告「英国におけるボローニャ・プロセスの取組と展望について」
国際協力員 山口裕史 http://www.jsps.org/advisor/pdf/2008_report_yamaguchi.pdf